

これからの井川ダム：
世界のダムとの比較から考える

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 静岡大学人文学部社会学科文化人類学コース 公開日: 2011-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 織田, 悠, 鶴田, 駿介, 奥澤, 淳, 斉藤, 愛 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10297/6328 |

これからの井川ダム

～世界のダムとの比較から考える～

織田 悠、鶴田 駿介、奥澤 淳、斉藤 愛

はじめに

1 日本のダム開発

- 1.1 人と水の関わり
- 1.2 日本のダム開発の歴史
- 1.3 ダムをめぐる諸視点
- 1.4 世界の動向と日本のダム開発のこれから

2 ダムによる井川の変化

- 2.1 井川ダムと補償の概要
- 2.2 人口の変化
- 2.3 産業の変化
- 2.4 インフラの整備

3 ダムに生きる

- 3.1 調査手段
- 3.2 ダムの補償問題
- 3.3 ダムと観光
- 3.4 今後の展望

4 他のダムとの比較

- 4.1 観光に特化したダム
- 4.2 地域の人々に開かれたダム
- 4.3 中空重力式を有効利用したダム
- 4.4 提言

おわりに

はじめに

静岡県の中央を流れる大井川は、川幅が広く水量も多い。大井川の治水は、いつの時代も重要な政策の一つであった。川の治水方法は様々だが、近代においては、ダムの建設が大部分を占める。大井川にも、全部で 32 か所のダムと堰、15 か所の発電所が存在する。その中でも、井川ダムは大井川の最も上流に位置する一つだ。

井川に発電所を作る計画は、明治の初期からあった。明治三(1870)年のイギリス人技師による井川訪問が、最初の計画ではないかと思われる。だが、その計画の多くは、実現せず単なる噂で終わった。昭和 20 年代に入ると、井川ダム(写真 1)の建設は現実化する。昭和 29(1954)年に着工され、同 32(1957)年に完工した。

井川におけるダム存在感は非常に大きい。井川に観光で訪れた方の感想をインターネットで調べてみると、まず、ダムに関する記述が見つかる。井川ダムは、井川湖と呼ばれるほど面積が大きく、バスや車などで井川を訪れた時、一番に目に入る。そのため、井川を訪れた人々の思い出の中で、井川ダムは存在感を示すのだろう。実際私も井川を訪れる以前から、井川と言えばダムというイメージを持っていた。調査を終えた今でも、私の中で生き続けている。

また、ダムは井川の人々の生活と共にあった。一週間の滞在中、多くの村民にインタビューする機会を得た。井川の人々が、井川での生活について語るとき、ダムは話の基準の一つとなる。多くの方が、ダムの建設やその歩みと共に、井川のことを語ってくれた。実際、井川ダムの建設は、人々の生活の転換点となった。建設に伴い、産業の構造が変わり、人々の生活も以前とは大きく変化した。そのため、ダムを語らず井川を語ることはできない。

本稿では、ダム建設が井川本村にどのような影響を与えてきたかに注目したい。加えて、世界や、日本のダム政策について論じることによって、井川ダムがどのような位置づけにあるのか、より大きな視点からとらえていきたい。井川ダムを、日本や世界の他のダムと比べることによって、このダムが今後どうあるべきか見えてくるのではないだろうか。(織田 悠)



写真1 井川ダム

1 日本のダム開発

私たちが調査を行った井川という地域はダムの建設によって、そこに住む人々の生活が

大きく変化した場所である。私たちのグループではこれによる社会変化などについて調査を行ったのだが、井川とダムについて考察するに当たって、この節では、よりマクロな視点から見たダムについて概観していこうと思う。

1.1 人と水の関わり

人間が生活していく上で水は必要不可欠のものであることは疑いようも無い事実である。いわゆる四大文明が興った地域が世界的にも大規模な河川の流域であったことから分かるように、水利の良い地域を生活の基盤としてきた。人々は河川の水を、飲用、洗い物、水運、農業用水等、様々な用途で伝統的に利用してきた。また、農耕の始まる以前の採集狩猟社会では、水中に生育する魚たちが重要なタンパク源であった。これは日本においても変わらず、日本には周りを海に囲まれ、国土には多くの河川が流れ、地下水も比較的豊富であるため、我々の先祖たちはこの豊富な水資源を有効活用し、独自の文化を築き、私たちは現在もその恩恵を享受している。

しかしながら、その豊富な水は人々の生活を支える一方で、生活に直結しているあまり、そこに異常が発生すると人々の生活に多大な影響を及ぼすことも事実である。工業化によってその地域周辺の河川環境が悪化すると、比較的最近の例では高度経済成長期の日本における公害病のような問題を引き起こす。

さらに、古来より抱える、人と水の重大な問題が河川の水のコントロールであろう。それには「治水」と「利水」二つの面からのコントロールが必要である。「治水平天下」（治水に成功したものが天下を治める）という中国の古い格言が表すように、国を治める上で治水は古くから重要な施策であるということがわかる。また、日本においては、水の許容量超過から起こる洪水のような水害とは逆に、決して広くは無い国土の中で気候の違いから瀬戸内地方などでは渇水の発生する地域もあり、利水に関する施策も必要である。

1.2 日本のダム開発の歴史

日本は明治時代に成功した産業革命以来、工業は近代化に成功し、それにともなって人々の生活も近代化し豊かなものになり、都市も発展した。現在のような大規模なコンクリートダムが建設され始めた。なお、本節におけるダム開発の歴史および背景は、主として『よくわかる 環境社会学』（鳥越、帯谷 2009）を参考にしている。

日本のダム開発の背景

ダム建設には、主に二つの背景が考えられる。

都市が発展するにともない、人口は都市部に集中し始め、食糧の安定的な供給や安全な生活が求められた。詳しくは後述するが、河川に関する自然条件の中の厳しい日本においては、「治水」と「利水」が重要な課題となった。日本において、河川の水のコントロールはダムによってなされてきた。ダム開発は、「治水」と「利水」という河川政策の二つの主

要政策の結節点として、大きな役割を担ってきた。「財団法人 日本ダム協会」の集計によると、既設と新設合わせて 2867 であり、うち明治以降竣工のものは 2526 にも上る。

治水は国家事業である。国土交通省が掲げるダム開発の基本理念¹をまとめると、以下の四点である。

- 1) 急峻な地形、梅雨期と台風期に豪雨が集中するという厳しい自然条件下にあるため、大雨が降ると、河川に水が一気に流れ出し洪水をもたらし、日照りが続くと、川の水が少なくなり水不足となって、生活や経済活動に大きな影響を与えること。
- 2) 全人口の 51 パーセント、資産の 75 パーセントが、河川の下流域に広がる河川氾濫域(国土面積の 10 パーセント)に集中するという日本の国土利用形態は、欧米に比べ特異なものであること。また、下流域の河川周辺は、高密度に利用されており、洪水に対応するためだけに川幅を広げておくことは、国土の有効利用の観点から不適切であり、下流域で高度利用されている土地の標高は一般に低く、堤防を嵩上げすることは、一旦災害が発生した場合、返って被害を大きくすることから避けることが治水の原則であること。
- 3) これらの観点から、洪水を防御し、水が豊富なときに水を貯めて水不足のときに補給するダムは、日本の国土条件下では有効な河川整備手法の一つである。
- 4) ダムによる水力発電は、化石燃料の消費量が極めて少ないクリーンエネルギーである。

このような理念を背景としながらダムによる河川政策の正当性を説明し、公共事業の主軸として、ダム開発を行ってきた。

また、工業や生活が近代化すると、電力の需要が高まるのは必然である。地下資源の乏しい日本では、大規模なダムによる水力発電に電源の役割が求められた。富国強兵を掲げて近代化をひた走る日本にとって、ダム開発は国益に沿うものであり、全国各地でその建設が盛んに行われたのである。

戦後のダム開発

戦後のダム建設を促進した要因として、終戦後間もない国土の荒れた日本に追い討ちをかけるように連年襲った、台風による水害があった。国内では水害対策として河川の整備が注目された。さらに大きかったのが、戦後の更なる工業化による電力不足と都市への人口流入と集中による都市の水不足の問題であった。これらの解決策として、1950 年～60 年代には電源開発・水資源開発に関する法制度が整備された。具体的には、電源開発促進法(1952 年)、特定多目的ダム法(1957 年)、水資源開発促進法(1962 年)、そして、新河川法(1964 年)が挙げられる。こうした背景の下、当時の建設省(現国土交通省)は、全国の河川を一元的に管理する行政の主体となり、戦後の公共事業の一環としてダム開発を推し進めた。結果、¹⁾ 日本には狭い国土の中に、支流を含めダムの無い河川がほとんど見られないほどの数のダムが存在するようになった。

¹国土交通省ホームページ <http://www.mlit.go.jp/> (2011/10/01 現在)

1.3 ダムをめぐる諸視点

高度経済成長が終わり、バブル経済も終わりを迎えると、人々の価値観が変化した。近代化への大きな希望を抱き、物質的な豊かさを求めた国民は、日本が先進国の仲間入りを果たし、世界的にも有数のモノにあふれた国家へと成長すると、徐々に物質的な幸福から精神的な幸福を求めるようになった。そうなると、日本の経済成長を支えたダム開発という公共事業も当然のように議論的となった。この節では、ダムをめぐる視点、とりわけ主流となりつつある否定的な視点について記述しようと思う。

肯定的な視点

現在日本には、前述のように 3000 近くのダムが存在しているが、その総貯水量はアメリカのフーバーダム一箇所の半分程度でしかない。水が豊富そうに見えて、実はそうではないという現実がある。近年騒がれている地球温暖化により、世界的に集中豪雨や旱魃が発生している。日本においても例外ではなく、「治水」と「利水」の両面において効果を発揮するダムの存在は大きい。

また、化石燃料を使った発電からの脱却が叫ばれる昨今では、火力発電以外の方法での発電を考えなければならない。太陽光発電や地熱発電などのクリーンエネルギーでは、現在の電力消費量を賄えるだけの大規模発電が難しく、第一線での運用には現在のところ向いていない。これまで危険性は指摘されながらも、その効率の良さから火力発電の代わりとして期待され国も推し進めていた原子力発電も、2011 年のいわゆる東日本大震災取り沙汰されている福島第一原子力発電所の事故以来、改めてその危険性を目の当たりにし、その他様々な問題が浮き彫りになったため、今後その規模の縮小は免れないであろう。こうして見ると、現在水力発電は日本においてなくてはならないものである。

こうした理由から、治水・利水・エネルギーに総合的に効果を発揮するダムは、今後も必要であるという意見がある。

否定的な視点

多数のダムが建設され、多くの成果を挙げてきたが、1990 年ごろからはその問題点が注目され始めた。主なものが、ダム開発による河川環境の悪化、ダムによる治水方法に関する疑問である。また、ダム建設に反対する住民運動もこの頃から盛んに行われ、独占的にやってきた国の河川行政と地方との衝突も頻繁に見られるようになった。これらについて上野鉄男による『治水事業をめぐる諸問題とこれからの治水の課題と展望』（京都大学防災研究所年 第 45 号 B・1 2002）を参考にしていきたいと思う。

1) ダムと環境問題

これについては第一に、ダムという大規模なインフラを建設するということは当然のように建設される地域自体の自然環境に大きな変化をもたらす。生態系の破壊や気候の変化がその例として挙げられる。

さらに由々しき問題は、ダムが建設された河川自体に大きな環境の変化をもたらすということだ。河川には浸食作用と堆積作用があり、ダムが無い場合にはそれらが平衡状態にある。しかし、ダムが建設されることによって流砂のバランスが崩れるのだ。つまり、上流ではダムが土砂を堰き止めるので河床が上昇し、さらにその上流側に背砂が成長する。この背砂は上流部の河川環境を破壊するばかりか、洪水位が高くなることで水害を発生させることもある。一方で、下流域においては土砂の供給が遮断されることで河床が低下し、海岸部で干潟の交代や海岸侵食が発生することがある。また、堆積よりも侵食が進むことで河床が平坦化し、生態系にとって重要な瀬と淵が破壊されることも起こるのである。

2) ダムによる治水への疑問

日本において大規模な治水事業が行われ始めたのは戦国時代以降である。それは武田信玄や加藤清正による堤防の建設にみる事が出来るが、当時は現地の気候や地形の条件に合わせた治水をおこなってきた。しかし、明治以降の近代化の中で治水事業にもヨーロッパの技術が導入され、現在のようなダム建設や放水路の開削による、水を河道から溢れないようにする治水へ変わった。ここで問題となるのは、台風や地震による災害の心配がないヨーロッパ諸国と同じ理論で、それらの多発国である日本の治水を行うことの危険性である。短期間に集中的な豪雨に見舞われた場合、閉じ込めきれず溢れ出した水による被害は自然のままの河川より大きくなるであろうし、地震によって破壊されることも考えられなくない。河川の下流域に大都市の発達した現在においては、このことは軽視できない問題である。

3) ダム建設反対の住民運動

1990年代前半の長良川河口堰の建設・運用に対する住民と行政の衝突や環境運動の全国規模での展開を契機として、大型公共事業の見直しは1つの社会的争点となり、ダム建設をめぐる衝突はその象徴的なものとなっている。最近では、ハッ場ダムや川辺川ダム²がその例として有名だが、いずれにしても住民との補償問題や水没地域の住民の反対といった従来の争点に加えて、これまで述べてきたような、ダム自体に対する否定的な意見が反対運動にも目立つようになってきた。ダム建設反対運動は全国各地で展開されるようになり、1996年以降、新たに計画された多目的ダム事業がほぼゼロ水準で推移している。長野県の「脱ダム宣言」など県レベルでの政策にも表れるようになり、ダム開発による河川政策は大きな転換期にあると言わざるを得ないであろう。

1.4 世界の動向と日本のダム開発のこれから

ここまで日本のダム事情について見てきたが、世界的に見ても、ブラジルのように水力

²ハッ場ダム、川辺川ダムは共に現在も政府と住民の間で建設の是非をめぐって論争が行われているダムの代表である。ハッ場ダムは群馬県吾妻軍長野原町に建設予定の多目的ダムで、1952(昭和27)年に計画が発表されたが、観光資源の水没や補償の行き先等が問題となり計画は頓挫している。川辺川ダムは熊本県球磨郡相良村に1966(昭和41)年に建設が計画されたが、住民の間で賛否が分かれ、現在も計画は進行していない。

発電に大きく頼っている国は別とすると、ダムに対する意見はほぼ同じである。エジプトのアスワン・ハイ・ダムや中国の三峡ダムといった大規模なダムが建設されてはいるものの、ダムのもたらす負の部分は未だ解決されておらず、大きな課題として残っている。ダムに抛らない治水も進められ、その撤去が進むところもある。世界的に見てもダム開発は転換期にあることは間違いないようである。

戦後に推し進められた大型公共事業は、様々な観点から一つの社会的争点となり大きな転換期にある。とりわけダム開発は交通網整備のような公共事業とは異なり、人の命に関わるものであるから、世論に左右され安易に結論を出してしまうことは危険である。世論や国際的な事情に迎合することなく、日本の地理的特質や経済的な効果などを踏まえた多角的な議論を展開し、時代のニーズに合ったものに変容させていくことが肝要であると感じた。(鶴田 駿介)

2 ダム建設による井川の変化

この節では、実際にダム開発が行われた井川に着目する。

ダム建設に伴い、井川の生活は大きく変化しただろうと仮説をたてて私たちはフィールドワークを行った。実際、インタビューからも変化した、便利になった、近代的な生活になったという話を聞くことができた。ダム建設当時は、さながら文化都市のようであったという。では、具体的には何がどのように変化したのだろうか。ここでは聞いた話と集めた資料から、人口、産業、交通に着目し詳しく記述していく。さらに、変化にはダム建設の補償の内容も十分絡んでくると考え、これもあわせて述べていきたいと思う。なお、本節は以下の文献に依拠している(武貞 2006、井川村(編) 1958)。

2.1 井川ダムと補償の概要

大井川はその流勢が強く、また降雨量も多いため、この大きな落差と豊富な水資源を利用しての電源開発は早くから着目されてきた。明治 39(1906)年に大井川水力電気会社により計画が立てられて以来、たびたび電力会社が調査を行い開発の計画を立ててきたがどれも実現に至ることはなかった。

昭和 23(1948)年、静岡県は井川ダム建設を含む大井川総合開発計画を検討し、昭和 27(1952)年に入ると、中部電力のダム建設への動きは活発化した。村は同年にダム対策委員会を組織したが、このダム建設は水没世帯 193、水没耕地約 60 町歩と、大きな被害を伴うものだったため、さらにこれを拡大し再編成してダム建設に伴う補償の交渉にあたった。ダムの容認についての井川村の三大原則は、①村民の永年に亘り希望する文化の障壁となる大日道路をダム完成までに隧道として貫通、②村造りを良くし文化の水準を高め、③村民の納得する個人補償の完遂、現在を上廻る民生の安定であった。これを受け、最終的に決まった補償の内容は、これまでの金銭による補償は最良の方法ではないとして、現物補償を基本としたものだった。水没者の原状回復及び生活の安定、さらに産業の改善振興などを考

えることにより生活の向上をはかるといふ考えのもと、現物補償の内容として新しい村造りが計画され、項目には移転及び農地対策、道路と交通、公共団体などがあつた。協定が結ばれると、ダム建設は昭和 29(1954)年に着工し、昭和 32(1957)年に完工した。ダム建設により、村の半分は沈み、学校だけでなく神社の移転もあり、火葬場や墓地も新たに設置された。このような生活基盤の大きな変化が、人口や産業などの変化にも大きく関わることとなる。

2.2 人口の変化

井川村の人口はダム建設を経て大きく変化した。ダム建設工事開始以前の昭和 25(1950)年の国勢調査によると、世帯数 543 世帯、人口 2992 人であつた。昭和 27 年に井川ダムの準備工事が始まると、ダム工事関係者の移転などにより村に人が入ってくるようになり、人口は増えていった。昭和 28(1953)年にはダム工事関係者は 598 人だったが(表 1)、昭和 30(1955)年には 1001 人、ダム完成後の昭和 34(1959)年には 2163 人と大きく増加した(表 2)。これにより、村の全体の人口は増え、昭和 35(1960)年に行われた国勢調査では、世帯数 1300 世帯、人口 8236 人と昭和 25 年時に比べ、人口においては 5244 人増加した。井川ダムが昭和 32(1957)年に完成したのに対し、それから三年後に人口のピークを迎えることとなったが、これは井川ダムの建設が終わつたのち、今度は井川村よりさらに奥に畑薙ダムを建設していたことによる。畑薙ダムは井川ダムの時のように軌道を設けず、井川村を通る道路を使って物資や建材が運搬された。井川村は、畑薙ダムへの中継地点であつたためダム関係者の出入りが多かつたと考えられる。

表 1 井川村人口 (昭和 28 年 5 月当時)

| | 世帯数 | 男 | 女 | 計 |
|-----------|-----|------|------|------|
| 一般村民 | 539 | 1406 | 1430 | 2836 |
| ダム工事関係転入者 | 71 | 456 | 142 | 598 |
| 事業関係転入者 | 1 | 51 | 2 | 53 |
| 所属外 | 6 | 9 | 7 | 16 |
| 合計 | 617 | 1922 | 1581 | 3503 |

出典：『井川村の概況』昭和 28 年度

表 2 井川村人口 (昭和 34 年 5 月当時)

| | 世帯数 | 人口 |
|-----------|-----|------|
| 一般村民 | 457 | 2621 |
| ダム工事関係転入者 | 398 | 2163 |
| 合計 | 885 | 4784 |

出典：『井川村の概況』昭和 34 年度

出典：『井川村の概況』昭和 34 年度

また、ダム建設当時には、子供の人口増加も見られる。水没による学校の移転がありながらも、昭和 28 年時、井川小学校は生徒数 211 人だったのが昭和 30 年には 302 人、井川中学校は 239 人から 302 人に増えている。現在の井川小学校、中学校ともに生徒数は一桁であるのに対し、かなり多くの生徒がいたことがわかる。

一方、水没により村外へ移転する者もあり、村に人が入ってくるだけではなく、出ていく人もいた。ダム建設により村の半分が湖底に沈むこととなったためである。昭和 28 年当時、井川村の世帯数 539 世帯、人口 2836 人のうち、水没区内の世帯数は 187 世帯、1120 人で、約三分の一が水没した(表 3)。そのうち村外へ出て行ったとされるのが 99 世帯ある。これには家族の一部だけが村外に出て一部は村内に残ったものなどを含んでいる。家族の全員または一部が村外に移転したもしくはすることが確実な世帯数は 78 世帯と推定されている。このように、移転者はいたのだが、それを大幅に上回る人、特に先に述べたようにダム工事関係者たちが村に入ってきたため、ダム建設以前と比べ、人口は大幅に増加することとなった。

表 3 水没区内人口及び世帯数

| | 井川村 | 水没区内 | 百分比 |
|----|------|------|-------|
| 人口 | 2836 | 1120 | 0.394 |
| 戸数 | 539 | 187 | 0.347 |

出典：『井川村の概況』昭和 28 年度

しかし、畑薙ダムが完成してからは、ダム工事関係者の多くが村から出ていき、徐々に人口は減少していった。また、村には中学校までしかなく、大体の子供は高校入学のため村を離れ、そのまま井川に戻ってこない。さらに、もらった補償金で静岡にもう一つ家を持つ人も多く、こういったことも原因で、人口が減少していったと考えられる。平成 22(2010)年の国勢調査によれば人口は 631 人で、ピーク時の約 13 分の 1 の人口である。この人口変化をもたらしたのは、少子高齢化と村の存続の危機であった。

このことから、井川村の人口はダム建設によって一時は大きく増加したものの、ダム開発が一度終了すると、それ以来人口は減少する一方であったといえる。

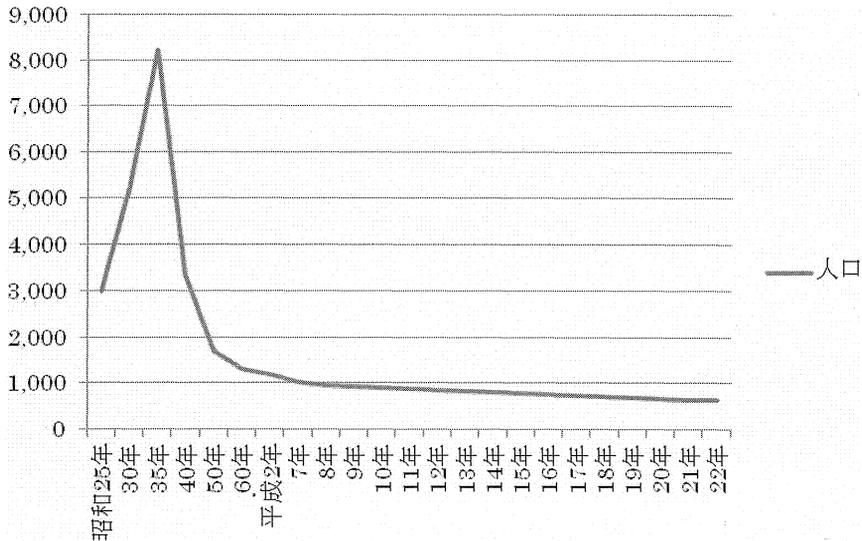


図1 井川地区の人口変化(昭和25年～平成22年まで) 資料提供：静岡市役所井川支所

2.3 産業の変化

産業についても、ダム建設前後で大きく変わった。井川村では、昭和28年全戸数のうち農業約44パーセント、林業約19パーセントで農業と林業だけでも、全体の半数以上を占めており、サービス業、商業などのごくわずかであった。しかし、ダム建設中は、建設業、電気業、サービス業、商業などが増え、林業の世帯数は徐々に減少していった(表4、表5参照)。

表4 産業別戸数 (昭和28年5月当時)

| | 農業 | 林業 | 建設業 | 電気業 | 製造業 | サービス業 | 商業 | 通信運輸業 | 公務 | 公益業 | 無業 | 合計 |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|----|-------|----|-----|----|-----|
| 戸数 | 271 | 116 | 94 | 17 | 11 | 7 | 16 | 1 | 38 | 18 | 28 | 617 |

出典：『井川村の概況』昭和28年度

表5 産業別戸数 (昭和34年5月当時)

| | 農業 | 林業 | 建設業 | 電気業 | 製造業 | サービス業 | 商業 | 通信運輸業 | 公務 | 公益業 | 無業 | 合計 |
|----|-----|----|-----|-----|-----|-------|----|-------|----|-----|----|-----|
| 戸数 | 228 | 79 | 279 | 125 | 16 | 18 | 61 | 8 | 42 | 21 | 8 | 885 |

出典：『井川村の概況』昭和34年度

まず、林業であるが、ダム建設以前の井川で、農業に続いて従事している世帯数が多いことから、井川の主な産業であったといえる。しかし、ダム建設が始まると、昭和 28 年では 116 世帯であったのが、昭和 34 年では 79 世帯に減っている。これについて、ダム建設によって川狩りができなくなったことと関わっているのではないかと推測した。

川狩りとは川を使って材木を流すことで、大井川流域はこの川狩りを江戸時代から利用し、材木の運搬を行っていた。井川も川狩りの中継地点であった。しかし、ダムによって、川は沈み、川狩りが行えなくなった。このことが、林業を衰退させたのではないかと私たちは考えた。だが、井川の人々から話を聞くと、あまりそれとは関係がないようだ。確かに川狩りに来た人々が井川に落とす金によって経済は支えられていたが、井川の人々が川狩りを利用していただけではないからだ。川狩りが使えなくなってから、材木の運搬は専ら道路で行われることとなった。しかし、トラックを走らせるような道はなかった。そこでできたのが大目道路を整備した井川林道である。この道路は、補償の内容にも含まれており、この道路によって材木が運ばれるようになった。特に、重い広葉樹や照葉樹を出荷することが可能となった。このようなことから、ダム建設後も林業によって経済が支えられていた。林業が廃れていったのは、ダム建設よりさらに後になる。インフォーマントの A 氏によると、昭和 60 年頃から海外の木材が入り、日本の木材は高騰したため売れなくなったという話を聞いた。現在ではほとんど林業に従事する人はいない。

農業においては、ダム以前は地理的な条件から耕地所有面積は少なく、米作はごくわずかで、主食は雑穀であった。森林伐採の跡地を焼いてヒエ・アワなどが栽培されていた。井川における農業は自給自足的な面が強く商品作物はほとんど見られなかった。しかし、ダム建設による補償によって、農業経営の指導が入り、水田を開くために開拓された西山平という土地では、米作に力が入られるようになった。技師の指導の下、数年米作はうまくいったようだが、気候的な不利などもあり、すぐに水田は減っていくこととなった。西山平までインタビューに行ったところ、水田を持っている方に話を聞くことができた。その方の持っている田んぼの広さでは、普通 7 俵とれるところが 3 俵くらいしか取れないと言っていた。他には、お茶や山葵、椎茸などが建設直後では代表的な産物だったという。現在ではトウモロコシも育てており、これらは静岡市街へ出荷することもあるが、ほとんどの家では農業は自給自足であるようだ。

商業、サービス業については、ダム建設当時、大きく増えることとなった。昭和 28(1953)年では、617 戸数のうち、サービス業 7 戸、商業 16 戸だったが、ダム完成後の昭和 34(1959)年では、サービス業 18 戸、商業 61 戸となった。静岡新聞の記事によると、旅館は 2 軒から 6 軒、八百屋と魚屋が新しく 2 軒、雑貨屋、化粧品屋、パーマメント屋もあったとある。また、井川の人々の話では、ダム工事関係者が村に入ってきたために、映画館やパチンコなどの娯楽施設もあったという。しかし、現在、映画館などは見られず、娯楽施設のようなものはほとんどない。A 氏は、「ダムで現金収入を得ることができるから職業はそっちに流

れた。商店と農業を兼職していたけど商店一本に絞ってしまった。開発が終わると結局続かない」と言っていた。

産業においてもやはりダム建設当時は、サービス業や商業が多くなったが、人口の減少などもあり、娯楽施設などは現在では姿を消している。村造り計画により、農業のあり方も変わったようだったがそれもうまくはいかなかったようだ。

2.4 インフラの整備

井川はダム以前、陸の孤島と言われていた。理由としては、井川村から出るには徒歩しかなかったからである。ダム建設以前、道路といえば井川本村から田代へ通じる小型自動車を通れる道が一本あり、他はいずれも徒歩道で、対岸との交通はすべて吊り橋であった。静岡へ出るためには大日峠(標高 1150m)を徒歩で越さなければならず、静岡まで行くのに一日はかかったという。また、大日峠を越す際は荷物も背負っていかなければならなかった。これに対しては昭和 11(1936)年に、村の森林組合によって大日峠越えの荷物輸送用の索道が架設されたが、まだまだ井川は静岡との時間的距離は遠かった。こういった辺境の地にダム建設を行うため、ダム工事は交通路の開発に第一に着手した。奥泉が終点であった中部電力専用の軌道は閑蔵を経てダム近くの西山沢まで延長敷設され、昭和 29(1954)年 7 月に完成し、井川に新たなダム建設の重要な交通ができることとなった。

また、村造りの一環として村内道路付替計画を立て、西山沢から小河内に至る幅員 6m(田代、小河内間は 4m)の幹線道路及び上坂本・岩崎間の連絡道(幅員 270m)を計画し、前者は昭和 28 年に着工、後者は昭和 29 年に着工、いずれも竣工した。対岸との連絡のためには全長 256m の井川大橋が架設、小河内橋も自動車も通行できる吊り橋に架け替えられた。また、対岸に渡る唯一の方法であった井川村にかかっていた橋はダム建設により水没したため、ダムにより湖となった井川湖水上を走る渡船が設けられた。

さらに、村人が特に望んでいたと考えられるのは、大日道路の整備である。これには中部電力だけでなく、国や県なども工費を出した。当初は大日峠にトンネルを掘って静岡市へ自動車道が考えられていたが、大日峠の破碎地帯であったため、トンネルを掘ることは困難だった。そのため、口坂本を起点とする大日道路は断念された。このことが補償を白紙に戻すところまで行きかけたことから、村人が切望していたことがわかる。結局、玉川村横沢を起点に笠張峠を越えて井川堰堤に結ぶ道路が林道として取り上げられ、総工費 2 億 5,000 万円の予算により、昭和 29 年度着工し、昭和 33 年に井川林道が完成した。

このように道路も整備され、静岡と井川までの時間距離は格段に短くなった。本村の人に話を聞いても皆便利になったという。確かに歩いて静岡まで行ったことのある人にとっては、とても交通の便は良くなったのかもしれない。しかし、ダム完成当時には 1 日に数本通っていた静鉄バスが、現在では横沢が終点となり、井川本村まで入ってくることはなくなった。かろうじて自主運行のバスが通っているが、これも 1 日に 3 本だけである。車で来るにしても、山道のカーブが多く幅も狭い道路では、時間にして約 2 時間半だとして

も気軽に訪れようとは思わない。本村の人も、毎日静岡の街まで行くわけではなさそうである。また、雪や雨の影響で通行禁止になることもある。実際、台風や大雨により道路が崩れたり、石が落ちてくることもあったそうだ。修復などにも時間がかかるのが現状である。現代の人にとっては便利な道であるとは必ずしも言い難いかもしれない。このことが井川に人が入ってこない要因になっているのではないかと考える。

道路工事は、確かに井川村の人々の暮らしを便利にするという意味もあったが、観光客などの人も井川に集めるための意図もあったように思う。しかし、結局現在では井川村まで足を運ぶものは少なく、逆に、井川から静岡までの交通がよくなったため、村から街へ人が出て行ってしまったと考える人もいる。ダム建設による交通の整備は、人口、産業とも大きく関わりを持っており、それらの変化にも大きく影響を与えていたと考えられる。(奥澤 淳)

3 ダムに生きる

井川ダムは昭和 32(1957)年に完工した。平成 23(2011)年まで約 50 年、井川の人々の暮らしはダムとともにあった。この節では、井川の人々がダムとどのように関わり生きてきたのかを明らかにしたい。

3.1 調査手段

本節では、井川で行ったインタビューの結果と『静岡新聞』のスクラップを利用する。スクラップは村民の望月澤弥氏が趣味で集めた。井川ダムの建設が決定した昭和 28 年から私たちが井川を訪れるまで約 50 年分の記録である。季節ごとのイベントなど、幅広い分野の井川に関係する記事が残されていた。その中から、ダムに関する記事を探し出し、写真を取った。大学に帰り、『静岡新聞』の過去の記事の中からその記事を探し出し、日付や『静岡新聞』の中での扱われ方を明らかにした。

一般に新聞など雑誌のスクラップでは、個人が自分の好きな記事のみを抜き出し保存する。そのため、その人の思想や、興味の形を描き出す。ダム建設以前から井川に住んでいた村民が作成したスクラップの分析は、井川の人々がダムとどのように関わってきたかを示す。加えて、50 年ほぼ毎日『静岡新聞』の記事がスクラップされているため、人々とダムの関係の変化を明らかにすることも可能だ。

3.2 ダムの補償問題

新聞から見る井川ダム建設

ダムに関連する記事で、スクラップに最初に登場するのは、昭和 27(1952)年 8 月 5 日で補償問題に関して記している。2 日後の「大自在³」という一面コラムにも、関係した記述が見られる。記事によれば、井川の村民はダム建設の補償として 26 億円の移設費を要求した。

³ 社説とコラムが一体となったもので、一面に載っている。『朝日新聞』の天声人語のようなもの。

「26億」という補償金は、当時どのくらいの価値であったのか。昭和28(1953)年7月6日の朝刊によると、昭和27(1952)年の静岡県の最終予算が123億円だったという。26億円というと、県の予算のおよそ6分の1だ。平成22(2010)年度の静岡県の最終予算は1兆6,393億6,400万円であった。その6分の1となると、現在では3,000億円弱に相当する。現在の県の予算と単純に比較はできないが、当時としてもかなりの額だったのではないかと考えられる。そのため、『静岡新聞』では記事として大きく取り上げ、「大自在」でも厳しく批判している。

『静岡新聞』は井川ダムの建設及びその補償に関して、村民に同情的な報道をしていた。補償金として26億円の要求があった翌年、昭和28(1953)年1月18日朝刊⁴の大自在でも、中電の国策のため土地の強制徴収をも辞さないという姿勢が、井川の人の反感を買い、途方もない金額を引き出したのではないかと当時の事を振り返っていた。朝日新聞など他の新聞でも、井川ダムに対する報道の方針は基本的に変わらない。おそらく当時の報道は基本的に井川ダムも含め土地を失う村民に同情的だったのだろう。佐久間ダム、秋葉ダムの建設に関しても『静岡新聞』では、同じく土地を追われる村民に味方する報道をしていた。そして、土地を失う住民側に支持する報道のスタンスは現在も変わっていない。

その後、26億円の補償金は、すぐに取り下げられ、井川側と中電の交渉はその後も続けられた。交渉の難航を伝える記事が再び登場するのは、翌年昭和28(1953)年だ。4月28日朝刊の「井川ダム愈々難関解決へ、県、大日隧道開さく検討」という記事である。この記事によると、中電は仮排水路の工事の早急な着工を求めていたが、井川側は工事を行うのならば、補償を行う裏づけとして、まずは大日隧道の工事を行うよう要求した。大日隧道の工事には、総額4億円かかる。そのため、中電は工事の実施を渋り、この後一ヶ月ほど、井川村と仮排水路工事の問題で争った。

仮排水路問題と同時進行で、補償交渉も進められており、井川村では、村民大会が盛んに行われた。(昭和28年5月5日朝刊)だが中電との交渉は難航した。5月9日の朝刊には、「きょう妥結の運び、井川ダム建設補償問題」という記事が載ったが、中電と井川の双方が主張をしあい、結局その日には決着がつかなかった。

その後、当時の静岡県知事の斎藤寿夫⁵氏が中電と井川の間に入り、補償金額を定める運びとなった。(昭和28年5月15日朝刊)翌日、斎藤知事により、井川ダムの補償金は総額一億円と決定した。長く続いた中電と井川の補償交渉がようやく終了した。このニュースは『静岡新聞』で大きく取り上げられ、5月15日の『静岡新聞』一面にその日の主要な記事として登場し、また同じく一面のコラムである大自在にも関連する内容が書かれた。これにより井川の水没民家一世帯に対する補償金が41万円となった。この時決定した補償金は当時としては、前例のない高額であったようで、大自在ではよくぞこれだけの金額を引き出し

⁴ この記事はスクラップにはなかった。昭和28年の1月18日の新聞には、佐久間ダムの補償問題が大きく取り上げられており、それに関連して、大自在で、井川ダムについて記載があった。

⁵ 第2代静岡県知事。1951年5月4日から1967年1月8日まで、16年、4期静岡県知事を務める。その後、衆議院議員、参議院議員をそれぞれ1期ずつ務めた。

た、と評価していた。また、補償問題が一段落したことで今後は本格的な工事が始まり、新たに多くの労働者が井川で生活するため、風紀が心配だとする記述もあった。

この後も、スクラップには補償問題に関する記事が多く残されていた。同年の10月8日の朝刊には、「井川ダム工事難航、補償問題は関知せぬと四地主遂に居直る」という記事があった。他にも、度々補償問題の見直しを求める事件は起こった。これほど多くの新聞記事がスクラップされていたのは、事件数が多かっただけでなく、スクラップを集めた井川村民のダムへの思いが強かったためでもあるだろう。

しかし、一度補償金額が決まった後は、『静岡新聞』での井川ダムの補償問題の扱いは格段に小さくなった。先ほどの四地主の居座りに関する記事も、記事自体のサイズは大きかったが、一面記事ではなかった。また、その後はほとんど四地主の行動に関する記事は見られず、静かに消えていった。『静岡新聞』のダム補償問題に対する興味は、昭和28(1953)年夏以降、補償交渉が決着した井川ダムから、まさに最中であった佐久間ダム、秋葉ダムに移った。

ダムの補償問題に関する記事に代わり、井川ダム関係で増えた記事は、新たな村づくりと観光、ダム工事の進行具合、そして、井川ダムの補償金が決めた昭和28(1953)年5月18日の大自在にも書かれていたように、井川の風紀問題であった。だが、風紀問題に関する記事は、スクラップの中には、ほとんど見られなかった。『静岡新聞』で調べてみたところ、工事関係者が数多く住み、人口が大幅に増えた井川では、犯罪数が増加したと分かった。たとえば、昭和28(1953)年10月31日の朝刊には、「井川郵便局を荒らす」という見出しの記事が載っていた。ダムの従業員だった間組の労働者二人組が井川郵便局に押し入り、金を奪おうとした。幸い、死者や怪我人はいなかったが、平和なはずの村に起こった事件として、多くの井川村民を怖がらせた。

村民の記憶から描く井川ダム建設

これまで、新聞記事から、井川ダムの補償問題や治安など、当時の井川の様子を振り返ってみた。ここからは、インタビューの結果判明した、当時の井川の様子について記述していきたい。

井川滞在中、村民にダムを建設中、どのような思いを抱いていたかを尋ねた。まだ小さかった、もしくは、生まれていなかったインフォーマーには、その当時の様子を親や周りの大人たちからどのように聞いたか答えてもらった。

回答の中で一番多かったのは、ダムを作ることには反対意見を持つてはいなかったという答えだ。村民Bは、社会的な責任からもダム工事に協力すべきだと考えていた、と述べた。井川ダムの建設が決めた昭和27年から28年ごろの『静岡新聞』を調べたところ、中電や東電が電力不足を理由に計画停電を実施していた記事が月に1、2枚発見された。また、天候などの要因から、十分な発電量を確保できないため、節電を求める記事も多かった。平成23(2011)年の現在も、3月11日の東日本大震災により、発電量が不足し、節電を

呼びかけられている。井川ダムが建設された当時も、日本全国で電力が不足し、そのために、静岡県内であれば井川ダム、佐久間ダム、秋葉ダムなど大規模な発電所を持つダムの建設が求められたのだろう。

また村民の C 氏は、ダム建設というと、住民による反対運動が起こるなど、交渉が難航するイメージが強いが、当時はまだそのような運動が広く行われるような時代ではなく、大きな反対は見られなかったと述べた。だが、『静岡新聞』の記事を調べてみた所、反対したものが少なかったにしては、補償交渉の難航を伝える記事が多かった。これに対して村民の C 氏は、ダムの補償交渉が難航したのは、ダム建設に反対していたためではなく、反対するというパフォーマンスにより補償金を多く得られたためではないかと述べた。

インタビューの結果によると、井川村民の多くは当時ダム建設に賛成していた。だが、『静岡新聞』には、村民大会が盛んに開かれたという記事があった（昭和 28 年 5 月 5 日朝刊）。その村民大会では、ダムの補償交渉をめぐる賛成派も反対派も互いに意見をぶつけ合っていた。また、新聞での補償問題の扱いが少なくなった後も、井川では上で挙げた四地主の居座りのような補償交渉の結果を不服とし、訴えるような事件があり、スクラップにも多くの記事が残されていた。これは、井川の人々がダム建設には、当時の社会的な状況もあり、賛成しつつも、先祖代々住んだ土地を失い、そこにダムという未知の人工物が作られることにさまざまな思いを抱いていたためだろう。それでも、最終的には団結し中電との交渉に臨んだ。50 年もたつと、当時の記憶が風化し、書き換えられていくが、新聞は、鮮明に当時の様子を描き出した。

3.3 ダムと観光

ダム建設が終了した後、新聞スクラップの中で、井川ダムに関係した記事は激減する。その中で、その後も一定間隔で登場するのが、観光に関する記事だ。見つかった記事を大きく二つに分類した。一つ目は、南アルプスを意識しての観光計画、二つ目はダムや自然を利用し井川の観光地化を目指した計画だ。

まず、一つ目の計画だが、こちらは南アルプスの国立公園化を目標としていた。今でも、毎年多くの登山客が訪れる南アルプスだが、当時は登山客を中心に人気があった。国立公園化を目指した動きは、ダム建設以前の昭和 28(1953)年ごろから見られるようになる。私が確認できた中で、最初の記事は、昭和 28(1953)年 7 月 20 日朝刊の「南アルプスの観光開発へ、静鉄局などが実地調査」だ。斉藤知事の仲裁により、井川ダムの補償金が 1 億円に決定した約 2 ヶ月後である。この記事の時点で、すでに計画は進行中であった。その後、南アルプスは昭和 39(1964)年 6 月 1 日に国立公園として指定を受けた。南アルプス全体の国立公園化を求めた政策のため、井川が先導を切って観光地化を進めていたわけではない。ダム建設により道路の整備が進み、南アルプスへの登山口の一つとして、井川が登山客の拠点となることを目指していたのではないかと考えられる。だが現在では、井川本村は交通の利便性の悪さもあり、登山客の利用はほとんどない。

二つ目の井川の観光地化も、ダム建設と同時に進められた。新しい村づくりの中で観光地化を目指していたことが、『静岡新聞』の記事からも確認できる。(昭和28年9月7日朝刊「新観光地へ変貌する井川村、静岡の軽井沢に」)こちらの観光地化計画の特徴は、ダムそのものを観光資源と捉えていたことだ。後に井川ダム、奥泉ダムの両ダムから、大井川下流の川根までの一帯が、県立公園⁶として指定を受けることとなるが、両ダムは人工の美を持つとして、県立公園の持つ資源として認められた。

ダム完成後、多くの観光客が井川を訪れることとなる。その支えとなったのはバス会社によるバスツアーだ。スクラップの中に静岡観光バス、東海観光バス(図2)などの各社が掲載した広告が残されていた(昭和33年5月7日朝刊)。それぞれ、「井川ダムへ」「井川ダム見学の旅へ」などといった見出しを掲げ、ダムをツアーの目玉としていた。バス以外にも、大井川鉄道が「風薫る高原と湖!新緑の大日峠井川湖へ」という広告を『静岡新聞』に掲載していた。これらの観光ツアーが井川に多くの観光客を運んできた。



図2 東海観光バスの広告

井川やダムに関する記事は、1970年ごろまで分野は観光に片寄りがあったが、スクラップ

⁶ 奥大井県立公園。昭和43年4月1日に指定された。井川、奥泉ダムのほかに寸又峽、接阻峽が観光地として挙げられる。

プの中に数多く残されていた。しかし、それらの記事も昭和45年を過ぎるとほとんど見られなくなる。変わって、平成に入ると、井川の少子高齢化や過疎化を憂える記事が増える。

3.4 井川ダム の 現状 と 今後 の 展望

井川の人々に、現在ダムについてどのような感情を抱いているかという質問をしたところ、多くの回答者が言葉を詰まらせた。じっくり答えを聞いてみると、ダムはそこにあることが当然であるため、改めて聞かれても分からない、と述べた。ダムが建設されてからすでに50年以上が経過し、井川の人々はダムを強く意識しなくなった。かつては盛んだったダムを利用した観光も、現在ではダム祭りのみとなり、存在感をなくしている。井川ダムの資料館が、ダムを挟んだ対岸に位置し、そこを訪れた観光客が井川本村へ足を伸ばしにくいという現状も井川観光衰退の一因となっているはずだ。

しかし、井川の多くの人々は、過疎化が進む現在の井川の状況を憂えている。一方で住民に高齢者が多いためか、かつてのように観光地化を目指し、今の生活に起こる変化を恐れているようにも感じた。インタビューに答えてくれた村民の中にも、そのような発言をしていた方がいた。とはいっても、今のままではいけない、という思いは皆が共有している。

井川ダムはこの50年の間に、井川の人々にとって、あることが当たり前存在となってしまう。井川湖の周辺は、とても美しい山々に囲まれ、渡船も渡され、大いに自然を満喫することが可能である。井川村民にとって普通のことであるこれらは、旅行者など外から来た人々にとっては、非常に魅力的に映る。また、平成23(2011)年3月11日の東日本大震災以降、福島県第一原子力発電所の問題などから、日本の電力政策は見直しを迫られている。井川ダムは、今後、電力政策という面においても、より多くの注目を集めるだろう。このダムは、現在、村民が考えている以上に大きな可能性を秘めている。

井川湖という、村の名前を冠するダムは、井川の村民、村を訪れる旅行者の双方にとって象徴的だ。井川に関係するすべての人に大きな影響を与えてきた。この50年間、井川の人々の生活は、ダムと共にあり、ダム建設による村づくりや、ダムを中心とした観光地化、その後の人々のダムへの関心の低下と村の衰退がつながったように、ダムとの関係の変化が、彼らの暮らしの変化に直結していた。インタビューにおいて、井川の人々は彼らの村が過疎化し、現状の維持が難しい状況にまで来ていると意識していた。今後、井川の人々の生活は、確実に変化するだろう。そして、彼らの生活が変化する時、それが良い形であれ、悪い形であれ、ダムとの関係の変化が、その根底にあるはずだ。(織田 悠)

4 他 の ダム と の 比較

現代では、ダムの存在が環境破壊の要因になるということが誇張され、むしろダムは取り壊したほうがよい、という風潮すら見受けられる。確かにダムが出来たことで従来の生態系の破壊につながり、河川周辺、もしくは河川の注ぐ海域で深刻な環境破壊が起こると

いったような事例は存在する。たとえば、八ッ場ダムは現在その在り方に関して問題になっているダムの1つだが、これは八ッ場ダムの建設に伴って環境資源や300を越える世帯が水没することに対して、住民の反対運動が起きたことがそもそもの発端であった。しかし、ダムの機能のひとつは洪水等の水害を減らすことであり、ダムができた事で水害に悩まされることが減った地域が存在することもまた事実である。

世界には5万ものダムが存在すると言われていたが、全く同じ状況で全く同じ用途の為に使用されているダムはない。これは、その土地のダムならではの影響や問題に焦点を当てることの重要性に繋がってくるのではないだろうか。そして、井川ダムについても改めて多角的な視点から見直してみる必要があるのではないか。

以下では、前章までに取り扱ってきた井川ダムの特徴・問題点を踏まえつつ、他の地域のダムはその地域にとってどのようなポジションにあるのかという比較をしつつ見ていきたいと考える。そこで、主に三つの視点から考えをまとめる。

4.1 観光に特化したダム

まず、ダム建設による利益還元のために、1973年以降「ダム水源周辺整備事業」という名の下に、従来は閉鎖的であったダムをより開放的に、そして地域発展の為に役立てようという動きがあったことについて述べる。

その事業の一環として、ダムを観光スポットにしていこうとする動きがあった。そのように観光に特化されているダムの話をいくつか見て行こうと思う。

まず国内の観光地化されたダムとして有名なのが黒部ダムである。黒部ダムは186mと日本で一番堤高の高いダムであり、世界的に見ても大規模な部類に入る。周辺に国立公園も存在し、立山黒部アルペンルートの名所のひとつとして多くの観光客が訪れる。黒部ダムのホームページでは現地の天候情報も知ることができ、観光客には助かる仕様になっている。

立山黒部アルペンルートは広告を駆使し、ダムを含めたその魅力を伝えようとしている。一例として平成23(2011)年9月25日付の『読売新聞』に掲載された広告の例を挙げる。この立山黒部アルペンルートは、様々な乗り物を乗り継ぐ事によって立山連峰を越え、黒部ダムへと到達することができる。ケーブルカーやトロリーバスなど、普段は経験できないものばかりである。そして付近の黒部峡谷には「黒部峡谷トロッコ」が走っており、今年で創立40周年を迎える。もともと黒部川の電源開発用に敷設されたものだが、今では観光用に運行されており、こちらも黒部の観光名所となっている。このような観光名所の紹介が新聞の一面に渡って掲載されていた。

前章でも触れている通り、井川の近くには南アルプスが存在する。南アルプスに登山に来た人々が井川のキャンプ場に立ち寄ることはあるようだが、彼らは訪れても井川ダムまで、本村まで足を運ぶことは少ないと言えるだろう。上記のトロッコのように、大井川鉄道は井川の電源開発のために敷設されたものだが、ダムの手前で終点の井川駅になって

しまっているためだ。しかしこのダムも、観光に特化した黒部ダムなどと比較すると、観光地としてはあまり機能していないように感じる。井川ダムは観光放流を行っていないし、ダム展示館は中電の管轄にあるが現在は無人となっている。これは中電側の人員不足の問題もあり、複雑である。観光のための広告も、広告費等の金銭的な問題が関わってくるため、黒部溪谷のように全面的に押し出せるもの魅力的な施設がない限りは、元を取ることが出来ず、無駄足に終わってしまう可能性が高い。

他にも国外の例を挙げてみよう。フーバーダムはアメリカのラスベガスに位置するダムである。堤高 221m というかなり大規模なこのダムは、アメリカ人にとって重要な建造物になっている。世界恐慌の余波の中、昭和 6(1931)年に着工し昭和 10(1935)年に完成したフーバーダムだが、その建設の為に流れ込んだ労働者が付近にあったラスベガスで遊ぶようになったおかげで、ダム完成後もその地でビジネスが繁栄し、現在のラスベガスの繁栄に影響を与えたと言われている。ゴールド・ラッシュで賑わったものの、金鉱ブームで去った後は失速していたラスベガスが再び息を吹き返すことが出来た要因の一つはこのダムの建設であろう。フーバーダムに観光に訪れる人々も多く、ラスベガス近郊の住人にとってもポピュラーな観光スポットになっているようである。なお、フーバーダムはアメリカ合衆国国定歴史建造物にも指定されている。

井川ダムもフーバーダム同様、建設時にはその周辺の村が潤い、賑わっていた。しかしその後人口が流出してしまったのが井川であり、そうでなかったのがここで挙げたラスベガスである。周りを山に囲まれており、より産業の発達した平野部とアクセスしにくい地形が、ダム建設時に流入した人口の定住を促すことができなかつたのであろう。田舎はどうしても都会の便利さという魅力に負けてしまう。井川ダム建設当時、井川に映画館やパチンコ屋があったが、ダム建設が終わり、人口の流出したためになくなってしまったという現実からもその立地の厳しさが窺える。

4.2 地域の人々に開かれたダム

次に、地域の人々に開かれたダムについて述べる。平成 8(1996)年に建設省はそれまで閉鎖的であったダム管理を転換、地域に密着したダムを目指し、「地域に開かれたダム」事業を開始した。これ以降、各ダム管理事務局はダム湖の一般開放、周辺整備に対する計画を提出することを指示されるようになった。その内容は漁業支援整備、花火やマラソン大会のようなレクリエーション、ダムカードの配布など多岐に渡る。

その例を具体化したダムとして挙げられるのが宮ヶ瀬ダムだ。神奈川県に位置する宮ヶ瀬ダムは、首都圏から 50 キロの距離に位置する。堤高は 156mあり、国内でも巨大な類に入るダムである。宮ヶ瀬ダム含む相模川水系のダムを管理する、相模川水系広域ダム管理事務所は積極的に市民にダムの解放を行い、事業に対する啓蒙と理解を図っている。多くのレジャー施設が設けられ、市民の憩いの場を提供しようという積極的な姿勢が見られる。たとえばダムの頂上部と直下部を結ぶケーブルカーを用意し、ダムとその下流に位置する

神奈川県立あいかわ公園とのアクセスを促進している。毎週水曜日と第二日曜日にはダムの観光放流も行っているようだ。また、この管理事務所は市民に対する薪の配布やダムの出前講座も行うなど、面白いサービスも行っている。

宮ヶ瀬ダムが観光に適しているのは首都圏からの近さという要因も当然あるだろう。ダムが出来たことで道が整備されたとはいえ、井川ダムは市街地から 2 時間ほどはかかってしまう。宮ヶ瀬ダムが積極的に地域の人々に関わることは、そもそも宮ヶ瀬ダムに来てくれる見込みのある人数の分母自体が大きいから出来るのだ、という意見も有るかもしれない。しかし、やはりダム管理側から手を差し伸べねば住民とのコミュニケーションというものは生じてこない。

他にも北上川 5 大ダムの一つ、御所ダムの例を見てみよう。このダムでは地域の様々な集団が主催となって、様々な催しを企画している。特に夏には花火大会に伴う大神輿のパレードや、岩手県伝統のさんさ踊りのパレードが行われる。夏場は、ダム湖がカヌーやウインドサーフィンに利用されるなど、海から遠い御所湖周辺の住民にとって、水遊びができる場所を提供しているようだ。湖畔も地域の人々に開かれており、周辺には公園、湿性植物園、ボート乗り場など様々な施設が設置されている。

井川ダムはこのようなダムと比べると、そこまで地域の人に開かれたダムとはいえないのではないかと。ダム湖周辺の施設を見てみると、少年自然の家や温泉は見られるが、手軽な憩いの場としての公園などは見られない。しかし、井川湖周辺の村は現在少子高齢化が進んでおり、宮ヶ瀬ダムや御所ダムのようにその地域に住む家族連れを対象にした憩いの場の提供というのはそもそも必要ないのかもしれない。地域の定義をどこまで拡大しているのかもまた問題である。もし地域の範囲を静岡市街にまで拡大して考えていいのなら、宮ヶ瀬ダムや御所ダムを参考にすべき点多々ある。それこそ静岡市街に暮らす“地域”の人たちの為に、憩いの場として公園などのレジャースポットを設けるのも一つの手だ。しかし新しい物を創造するには金銭的問題がどうしても付き纏うことも考慮しなくてはならない。井川の人にとっては長年親しんできたダム湖の風景が変わってしまうかもしれないという問題も生じる。

4.3 中空重力式を有効利用したダム

井川ダムは日本最初の中空重力式コンクリートダムである。この中空重力式ダムは日本に 13 基しか存在しないため、珍しい存在であると言えるだろう。

内の倉ダムは昭和 49(1974)年に完成した、日本最後の中空重力式コンクリートダムである。畑薙第一・井川ダムの次に大きな中空重力式である。このダムの内部は中空重力式ならではの 500 人ほどを収容できる空洞があり、音の反響の良いことから毎年この中でジャズコンサートが行われている。

井川ダムは現在内部の一般公開は行っておらず、基本的には夏休み期間に親子向けツアーとして、もしくは総合学習のための団体が中電に事前相談をした際のみ解放される。こ

これはダム展示館が無人であるように、中電側の人員不足の問題も関係してくるようである。しかし先に述べた通り、中空重力式は珍しく、その内部構造は魅力的であると考えられる。限られた期間に限られた団体にしか公開しないのは勿体ない。常に解放するということが無理だとしても、もう少し定期的に内部を解放する日を作ってもいいかもしれない。内の倉ダムのコンサートのように、内部でなにか催しをする、というのもかなり魅力的だ。

4.4 提言

井川ダムと他のダムをいくつか比較をしてみたが、以上の事を纏め、これからの井川ダムがどう在るべきか私なりに提言をさせていただこうと思う。

ダムが観光に特化するためには、インターネット環境の有効利用が必要であると考えられる。インターネットでの情報発信は日本全国、ひいては世界に対しても発信が出来る、いわば社会的に弱い立場の者にも発言の機会が比較的平等に与えられる場になっている。井川ダムでインターネット検索をかけてみると、中部電力のサイトの一部に井川ダムのページがあるだけとなっていて、どこか寂しい。私が提言をさせていただいたところで中部電力側に動いていただかねば、住民の手で井川ダム専用のオフィシャルサイトを作るというのは難しいことかもしれない。しかし井川は、井川情報ステーションという井川の観光スポットを取り扱った立派なホームページを持っている。このホームページのダムの頁を充実させるということが、地域の住民がダムの観光化に際して出来ることのひとつではないかと考える。たとえば先程述べた通り黒部ダムはウェブサイトがかなり充実している。中でもインターネットならではのコンテンツがダムのライブ映像の配信である。これは所定の時間内に黒部ダムのサイトにアクセスすれば、ライブ映像でダムの様子が見られるというものだ。映像を見ることで実際のダムに興味を持ってもらえるようになれば、ダムを訪れる人も増えるかもしれない。井川湖は渡船が通っているのも、その運航の様子などを映すことが出来たらこのような映像は効果的に働くと考えられる。他にもブログやツイッターなどの、気軽に始められ、ユーザーの多いツールも使い方によってはかなり強力な情報発信源になりうる。それをホームページに設置すれば、実際に井川に来たいと考えている人にリアルタイムで助言をすることもできる。上では、ダムまで観光客が来ても、特に本村に焦点を当ててみると人が流れてこないということも述べたが、本村に観光客の目を向けてもらうためには渡船の存在は必要不可欠になってくる。実際に私がフィールドワーク中に渡船を利用して思ったが、乗り場が分かりにくい位置にあるため、もしかしたら見落とししてしまう人がいるのではという危険性を感じた。もっと大きい案内看板など、目に付く印が必要なのではないだろうか。

井川をモチーフにした芸術作品のコンテストの促進もインターネットを通して行うことが出来れば効果的なのではないかと考える。中部電力が既に大井川水系発電施設を対象にしたフォトコンテストを行っているが、他にも市内の小学生など、ダムを含めた自然環境について学び始める年齢の子どもに対象をシフトした作文・絵画コンテストを行うのも一

つの案として挙げられる。様々なダムのホームページを見てみると、子ども向けに分かりやすく書かれたダムに関する質問コーナーがかなり見受けられる。ダムのような構造物は子どもにとって興味の対象になると考えられるので、子どもにダムをよく知って、自然について考えてもらうためにも、このようなコンテストを開催することは役に立つのではないか。

話を聞く限りでは、井川の人々の中には、ダムを観光に利用すべき、また、井川を観光地化すべきだという意見と、観光地になんてしなくていいからとにかく落ち着いて暮らしたいという意見と、両方の声が上がっていた。住み慣れた土地に観光客が流入してくるのに複雑な気持ちになる人がいることは当然のことである。しかし、観光地化が上手くいけばその土地が賑わい、潤うのも事実だ。フィールドワーク中に井川で行われている観光ツアーの立案に関わっている A 氏に話をお聞きする機会があったのだが、企画されたツアーの中には不振に終わっているものも結構な数あるようで、若い人の画期的な意見が欲しいとおっしゃっていた。井川は少子高齢化が進んでおり、若い人が出す意見というのは圧倒的少数になってしまうため、もっと相対的な目線で物事を見る必要があると感じているようだ。井川については非常に複雑な問題が絡み合っており、一口にこれからの井川をこうすればよい、と言うことは出来ない。しかし、これは私が感じた事だが、精神的な面からの改革も必要なのではないか、と思う。過疎化していく井川のこれからの少し諦めの念を抱いている人もいないのだろうかとは私はフィールドワークをしていて感じた。確かに井川は都会のようなきらびやかな建物や、目を見張るようなアトラクションはない。しかしそれでも、井川にはそこに住む人の温かさや自然の豊かさがある。そこ自体が都会にはない憩いのスペースである。井川とダムをどうしていくのかは、井川に住む人々のことや様々な影響を複合的に考慮していく必要がある。これから井川がどうなっていくのかは完全に予想はできないが、考え次第では観光に訪れる人も、井川に住む人も、より多くの人が幸せを感じる事が出来る井川を作ることが出来る可能性もある。(齋藤 愛)

おわりに

第一節からダムと井川に関して記述してきた。井川ダムは日本のダム開発の大きな流れの中でつくられ、井川村に大きな影響を与えてきた。それは水没による移転であったり、人口の増減であったり、産業の変化、交通の整備である。これらによって井川村の生活はダム建設以前と大きく変化することとなった。さらに、ダムに関する補償問題は井川を大きく揺らすことにもなった。また、当時はダムを利用した観光も行っていたなど、ダムと住民の関わりも積極的だった。しかし、現在ではダムまで人は来ても本村まで観光客が来ることは少ない。先に述べてきたように、ダムは井川に大きな影響を与え、井川にとってとても大きい存在に感じられるが、あまりに密着しているためか、今は井川の住民とダムとの目に見えた結びつき、関心が薄れてしまったように感じられる。

現在、井川本村は少子高齢化を迎え、地域の存続が危ぶまれている。井川に観光客が来

るようにエコツーリズムなどが行われているが、ダムを観光資源とした活動はあまりない。それは先にも述べたように、井川ダムから井川本村までの利便性が薄いということもある。また、これまで計画していたダムを利用した観光があまり効果を発しなかったこともあるだろう。

しかし、観光資源となっているダムや、地域活性化を担っているダムが世界には存在する。富山県にある黒部ダムは、アルペンルートの名所となっており、放流も行うなどして観光資源としての魅力が生かされている。アメリカのラスベガスにあるフーバーダムの建設は、携わっていた労働者がラスベガスで遊ぶようになったため、その地域の繁栄につながった。また観光として訪れる人もおり、観光スポットともなっている。岩手県盛岡市にある御所ダムでは、様々なイベントが行われ、夏場はダム湖でカヌーができるなど、黒部ダムとはまた違い、より地域に密着し、開かれたダムとして活用されている。

建設当時から村民の様々な思いがあるダムだが、大きく目を向ければ、重要な資源だといえる。そのため、井川ダムも他の地域のダムと同様に、人を集める道具、場所として利用されるべきではないかと考える。それを可能にするには、地域住民の関心をもう一度ダムに向ける必要があるだろう。ダムをまた地域にとっての資源にし、井川本村まで人を集めるには、地域住民がまずダムについて知る必要があると考える。ダム建設から50年以上たった今、建設当時のことを知る人も少なくなっている。ダムができた経緯や、その後の利用、そして現在の井川ダムがどのようなものであるかということを知ることによって、ダムへの地域住民の関心を再度高め、ダムを資源として利用しようという意識が必要である。この意識の基盤ができれば、まずダムを地域活性への資源として利用できるのではないだろうか。簡単にいくのではなく、さまざまな意見があるので、言い切ることはできないが、井川とダムの結びつきが強まることで地域の力というものも強くなるのではないかと考える。(奥澤 淳)

謝辞

最後になりましたが、報告書を書き上げるにあたって非常に多くの方にお世話になりました。貴重な現地の声を聞くことができ、資料も提供していただけたおかげで、非常に充実したフィールドワークとなったと思います。指導してくださった先生方、温かく迎え入れてくださった井川の皆様に、心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

井川村・静岡ニュース社（編）

1958 『井川ダムの記録』

上野鉄男

2002 『治水事業をめぐる諸問題とこれからの治水の課題と展望』 京都大学防災研究年報 第45号 pp433-448

武貞稔彦

2006 「ダム建設に伴う水没移転と人々の選択－戦後日本の経験から得られる知見－」

鳥越皓之、帯谷博明 編著

2009 『よくわかる環境社会学』 ミネルヴァ書房

森薫樹、永井大介

1986 『日本のダム開発』 三一書房

参考資料

静岡県安倍郡井川村発行

『井川村の概況』 昭和 28 年～昭和 34 年まで

望月澤弥氏所蔵

『静岡新聞』スクラップ 「昭和二十八年 井川ダム記録」

「昭和三十二年 井川畑薙ダム記録」

「昭和四十二年 井川記録」

「平成二十年 井川の記録」

『読売新聞』 2011/09/25 付

参考 HP

黒部ダムオフィシャルサイト

<http://www.kurobe-dam.com/> (2011/10/23 現在)

国土交通省

<http://www.mlit.go.jp/>(2011/10/24 現在)

国土交通省東北地方整備局 北上川統合管理事務所

http://www.thr.mlit.go.jp/kitakato/101event/go_event.html(2011/10/24 現在)

相模川水系広域ダム管理事務所 宮ヶ瀬ダム

<http://www.ktr.mlit.go.jp/sagami/> (2011/10/23 現在)

内の倉ダム[新潟県] - ダム便覧 -

<http://damnet.or.jp/cgi-bin/binranA/All.cgi?db4=0762> (2011/11/8 現在)